

News Letter

演劇の総合的研究と演劇学の確立

The 21st Century Centre of Excellence Programme, Waseda University
Development of Research and Study Methodologies in Theatre

報告「リトアニア・ポエティック・ドキュメンタリー映画祭」	1
特集記事	
ユネスコ世界無形文化遺産昆曲・中国伝統演劇京劇公	
開演古・公演報告/2005年度第一回研究成果発表会	2
◆演劇理論研究(西洋/比較)コース	3
◆芸術文化環境研究コース/演劇理論研究(舞踊)コース	4
◆古典演劇研究コース/アーカイブ構築研究(演劇)コース	5
◆アーカイブ構築研究(映像)コース	
/演劇理論研究(東洋)コース	6
イベントカレンダー	7
新刊紹介/編集後記	8

報告「リトアニア・ポエティック・ドキュメンタリー映画祭」



10月5日(水)のシンポジウムの様子

●プログラム

10月4日(火) 13:30~17:30

レクチャー : 「映画は時代を歩む」

ルーサー・ノレイカイト(映画・演劇評論家・ジャーナリスト)

映画上映 : リトアニア・ポエティック・ドキュメンタリー精選集Ⅰ

「ゼフィラ・トルナ」(1992年) 監督: ジョナス・メカス

参考上映 : 「FRONTIER」(2003年) 監督: 宮崎淳

10月5日(水) 13:30~18:30

レクチャー : 「映画における事実の問題—ドキュメンタリーの中の事実と解釈」

オウドリュス・ストニス(映画監督・プロデューサー)

映画上映 : リトアニア・ポエティック・ドキュメンタリー精選集Ⅱ

リトアニア・ポエティック・ドキュメンタリー精選集Ⅲ

ジョナス・メカスについての短編

シンポジウム : 「ポエティック・ドキュメンタリーとは?」

オウドリュス・ストニス、ルーサー・ノレイカイト、宮崎淳、司会: 岩本憲児

事業推進担当者 岩本 憲児

10月4日、5日の2日間、早稲田大学小野記念講堂で「リトアニア・ポエティック・ドキュメンタリー映画祭」が開催された。プログラムの詳細を述べる余裕はないが、私は準備段階と当日の司会を受け持った立場から、簡単な報告をしておきたい。

今回のプログラムは大まかに4日が旧ソ連時代の作品、5日が独立時代の作品と分けられ、4日は作品全体を見通す解説が評論家のルーサー・ノレイカイト氏によってなされ(「映画は時代を歩む」)、5日はドキュメンタリー作品制作に関する具体的な問題提起が映像作家のオウドリュス・ストニス氏によってなされた(「映画における事実の問題」)。リトアニアの映画について日本ではほとんど情報がないので、評論家と実作者とから、ある程度具体的な知識を得られたのはよい機会であった。

リトアニアでは旧ソ連時代に映画制作の割当があり、劇映画とドキュメンタリー映画はまがりなりにも一定数の制作が可能であったが、一方ではイデオロギー上の検閲が厳しかった。独立後に制作と表現の自由は得たものの、ドキュメンタリー映画制作の経済的基盤が弱く、逆に制作本数は激減したという。近年は劇映画の制作もごくわずか(年に数本程度)で、ドキュメンタリー映画をかける映画館もなく、テレビの活力に押されているという。このような、ドキュメンタリー映画の制作と上映をめぐる状況の厳しさはリトアニアだけの問題ではなく、世界中に共通していると言えるかもしれない。もっとも、ノレイカイト氏からのやや悲観的な発言に対して、ストニス氏からは、リトアニアのドキュメンタリー映画はヨーロッパに広く受け入れられている

と、ポジティブに見直す発言もあった。当人は映像作家であり、ヨーロッパ他の国々でも多数の受賞歴があるので、「国」としての問題よりも「個人」としての創作活動のありかたがより重要なのだろう。

2日目に、「ポエティック・ドキュメンタリー」という言葉は耳なれないが、リトアニアの特徴と考えていいのか」という質問があった。ノレイカイト氏からの返事は、明確にそのような特徴があるわけではないが、今回のプログラムをまとめる概念として使ったこと、また旧ソ連時代は社会的テーマが厳しい検閲下にあったため、題材や表現の細部をメタファーや象徴的なものに代えることも多く、叙情性も強いので、「ポエティック」と呼ぶほうがわかりやすいかもしれない、という主旨だった。

私の個人的感想では、初日の『老人の夢』(1969)におけるユーモアや諧謔に満ちたおばあさんたちの会話と表情、2日目の『日記』(2003)における長年連れ添った夫婦の罵り合いと絶望など、「ポエティック」とは呼べない作品にも魅力があった。他に、1950年代以降アメリカに移住しているジョナス・メカス監督からの特別参加作品(『ゼフィラ・トルナ』1992)、およびリトアニアへ一時帰郷したメカスとニューヨークの彼を撮ったリトアニア側の2本も上映された。とくに後者におけるメカスのおしゃべりが楽しかったことも付け加えておこう。日本からは映像作家の宮崎淳監督も参加、カンヌで「若い視点賞」を受賞した『FRONTIER』(2003)を初日に上映するとともに、2日目は質疑応答にも加わってもらった。

ユネスコ世界無形文化遺産昆曲・中国伝統演劇京劇 公開稽古・公演報告

早稲田大学21世紀COE演劇研究センター・演劇博物館共催、オール早稲田文化週間の参加企画としても後援を受けている「ユネスコ世界無形文化遺産昆曲・中国伝統演劇京劇公開稽古・公演」は、2005年10月17、18日の二日間にわたって行われた。

この度の公開稽古・公演は、学術的な観点に基づき、本場で通常上演される演目、あるいは本場でさえ滅多に上演しない演目を選び、より完全な形で上演することを念頭に企画した。上演演目には、昆曲の「乾元山」、清朝道光年間(1821～1850)の劇団「崇祝班」によって、前代の演劇である昆曲の手法を用い、創作された京劇「武戯」の白眉「挑滑車」、いわゆる純粹の京劇「赤桑鎮」、乾隆元年から五年(1736～1740)の間に清朝宮廷において創作された「昇平宝筏」に由来する「安天会」(「御馬監」、「偷桃盗丹」、「闍南天門」の場)を選んだ。出演は京劇の三大拠点のひとつである天津を活動基盤とする天津京劇院と、日本を活動拠点とする京劇団である新潮劇院との共演となった。出演俳優の主な布陣は、20世紀の名優李少春、李万春の芸を継承している董文華氏(「御馬監」、「偷桃盗丹」、「闍南天門」の孫悟空)、当代の名浄である康万生氏(「赤桑鎮」の包拯)、特別出演として銭宝森、孫毓堃の芸を継承している張宝華氏(「挑滑車」の兀朮)、張宝華氏の子息で、新潮劇院の主催者の張春祥氏(「挑滑車」の高龍)となった。



張春祥氏、張宝華氏の「挑滑車」



董文華氏の「偷桃盗丹」

17日小野記念講堂において14:40より一時間半にわたって、「響排」(伴奏付きの通し稽古)を行い、本来秘事とされる昆曲・京劇の稽古を公開した。今回の稽古は昆曲・京劇の裏の世界を披露する目的を持つ一方、天津京劇院と新潮劇院の俳優たちが初の顔合わせということで、古典演目はどのような形で伝承されるのかを再現する意味もかねている。18日大隈講堂において16:20より約二時間四〇分にわたって公演を行った。今回は実験的な公演とは言え、五つの演目に加えて序開きに昆曲・京劇の音楽演奏も組み入れ、出演者及び音楽演奏者が総勢25名という極めて少人数の構成にも係わらず、昆曲と京劇、「武戯」と「文戯」など多岐にわたる演目と、確かな芸を継承する名優たちによる至芸が披露された。

最後に、この場を借りて当の企画に惜しみない協力を下さった天津京劇院、新潮劇院の皆様にご感謝の意を申し上げます。

(演劇博物館助手 李墨)

2005年度第一回研究成果発表会

7月20日(水)13:00～16:00

西早稲田キャンパス6号館3階318教室

今年度最初の研究成果発表会は、以下のようなプログラムで行われた。



成果発表会の模様

- ①志村三代子(COE客員研究助手) 『第二の接吻』あるいは『京子と倭文子』—恋愛映画のポリティックス
- ②川島京子(COE客員研究助手) エリアナ・バグロバによる日本へのバレエ移植—日本での活動と来日前の芸歴について—
- ③青野智子(COE特別研究生) リージョナルシアターの存立基盤:アメリカ地域社会への定着過程における均質化の進行
- ④木村理子(COE客員研究助手) 歌で演じた革命期—コミンテルンとモンゴル演劇の成立—

各発表(25分)の後にそれぞれ質疑の時間(15分)が設けられていた。それぞれの発表が高度に専門的であるため、議論がしづら
いのではという懸念が当初はあったが、そのような不安を吹き飛ばす白熱した討議が繰り広げられ、終了予定時刻を大幅に超過する
ほどの盛会ぶりであった。(客員研究助手 川島健)

シンポジウム「演劇・国家・政治 現代演劇の戦略」

早稲田大学演劇博物館とパリ第10大学演劇映画表象研究センターとの間で「協力に関する覚え書き」が締結されたのを記念して、演劇理論(西洋／比較)コースでは、9月28日より10月4日まで、パリ第10大学よりジャン・ジュルドウイユ、エマニュエル・ヴァロン両氏を招聘して、5日間にわたって講演会・研究会・シンポジウムを開催した。

ジュルドウイユ氏は、演出家ジャン＝ピエール・ヴァンサンジャン＝ピエール・ヴァンサンの片腕としてドラマトゥルグを長年務め、ピュヒナー、プレヒト、ミュラーをフランスに紹介したドイツ演劇の専門家・翻訳家でもあり、さらにルソー、モンテーニュ、フーコーなど哲学者の言説を素材にした一連の作品によって演出家としても高く評価されているように、多彩な表情を持つ演劇人である。ヴァロン氏は、

政治学と演劇学の両方を専門とする、これまた多面的な大学人・演劇人であり、フランスそしてヨーロッパにおける文化政策研究の専門家として、文化省や演劇界との数々の仕事を実現させてきた研究者であり、一方でサーカス・大道芸の支援組織オール・レ・ミュールの会長も務められた経験の持ち主でもある。理論だけでなく、現場にも強い関心を寄せるフランスの演劇研究の最良の部分を日本に紹介することができたと自負している。9月29日(木)、30日(金)には、参加者との間に密度の濃い交流が生まれることを目的として、あえて通訳をつけずにフランス語のみを用いた研究会を設けた。10月1日(土)には、日本の演劇界から西堂行人氏(近畿大学教授)、宮沢章夫氏(本学文学学術院客員教授)を招いて、演劇創造における公共劇場の役割を再考するシンポジウムを開催した。10月3日(月)、4日(火)には、東京大学の招きで来日中であったフランクフルト大学教授ハンス＝ティース・レーマン氏とその公私にわたるパートナー、エレン・ヴァロブル氏を迎えて、現代演劇にとつての「ヨーロッパ」概念を再検討した。幸い、大変に多くの聴衆を得ることができて、多言語が飛び交う中、盛会のうちに一連の企画を終えることができた。交流はまだ本格化したばかりであるが、来年の秋には、パリ第10大学演劇学科にて17世紀演劇を専門とされているクリスティアン・ピエ氏を招聘する予定である。日本からも優秀な人材をパリに送り出したいと考えている。関係する皆さんには、ぜひともこの協定を未来に生かしていって欲しいと強く願っている。

10月1日(土)のシンポジウムの様子



(事業推進担当者 藤井慎太郎)

演劇理論研究(西洋／比較)コースでは学外から様々な研究者をお招きして数多くの講演会を企画しています。今回はそのうちから2005年度7月から10月までに行われた二つの講演会について紹介します。

第二回演劇論講座「ロシア史の中のチェーホフ」

講師：堀江新二教授(大阪外国語大学)

2005年7月22日(金)15:00～17:00／西早稲田キャンパス6号館318教室

2005年度の第二回演劇論講座ロシア演劇、特にチェーホフ研究の第一人者として名高い堀江新二氏をお迎えした。堀江氏は『三人姉妹』に使われる意味のない台詞に注目しつつ、その劇的效果と翻訳の可能性にも詳細かつ明快な説明をして頂いた。講義は貴重な映像資料とともに進められ、30名を超える聴講者の集中力は途切れることもなかった。講義の後には活発な議論が繰り広げられたことはいうまでもない。(客員研究助手 川島健)

■プロジェクト紹介

今年度、演劇理論研究(西洋／比較)コースは九つのテーマ別プロジェクト研究を抱えています。各プロジェクトが各自研究会・勉強会を催しています。

第二回 「ベケットゼミ」

20世紀を代表する劇作家サミュエル・ベケットはすでに世界的な名声を博しており各国で盛んに研究がされている。またベケットの戯曲はすでにシェイクスピアやチェーホフと並んで演劇界の定番となっているが、日本での関心は未だ充分高まっているとはいえない。そのような状況を打破するためCOE発足当時から岡室美奈子氏(本学文学学術院教授)の求心力とともにベケットゼミは行われてきた。メンバーは特別研究生を中心に約20名。ほぼ毎月行われるゼミには仙台や名古屋から駆けつける研究生もいる。ゼミは毎回研究生の発表と議論の場となっており、2006年に早稲田大学でCOE事業の一環として開催されるベケットシンポジウムに向けて切磋琢磨する機会ともなっている。(客員研究助手 川島健)

芸術文化環境研究コース 活動報告

国際研究集会 「歌舞伎の海外公演の反響調査をめぐって」8月18日(木)・19日(金)

芸術文化環境研究コースでは、国際交流基金および国際文化交流推進協会が各国の研究者と共同で進めている歌舞伎の海外公演の反響調査に協力している。今回の研究集会では、松竹大歌舞伎近松座の訪韓・訪米公演(2005年)に際して行われた反響調査に実際に携わった研究者が一同に会し、その調査概要や分析内容を報告し、最終的な調査研究報告のとりまとめに向けた課題整理などを行った。韓国側6名、アメリカ側2名、日本側7名の研究者と基金・協会のスタッフ5名、日本側学生4名が参加し、早稲田大学において2日間にわたり集中的に討議を進めた。

今回の調査にあたっては、観客へのアンケートやインタビュー、関係者へのヒアリングなどを現地で現地の研究者が行っている。研究集会では、アンケート調査や観劇における各国の習慣の違いや、海外公演における成功とは何か、公演と関連した教育プログラムの方法やメディアとの連携、字幕・イヤホンガイドの功罪といったテーマにも話は及び、海外公演・国際文化交流の意義や課題とともに、研究者の役割、また継続的な調査研究のあり方などが議論された。

(客員講師 宮崎刀史紀)

正面右より、古井戸秀夫教授(事業推進担当者)、Laurence Kominz教授(米国・ポートランド州立大学)、李応寿教授(韓国・世宗大学)、河竹登志夫名誉教授(早稲田大学)

D-HAUSに出展

「日本におけるドイツ年」を記念して実施されているイベント「ドイツ体感スクエア・D-HAUS」会場内に、COEの研究成果も活用した「ミニ・ミュンヘン」に関するブースが出展されている。詳細は、<http://d-haus.jp/> 参照。10月4日～11月23日、南麻布の旧自治大学校キャンパス内にて。(事業推進担当者 卯月盛夫)



演劇理論研究(舞踊)コース 活動報告

演劇博物館とブルガリア国立演劇・映画アカデミーは、今年度より箇所間協定を締結した。この機会を活かし、来日した同アカデミー教員、学生を迎えて舞踊コース、芸術文化環境研究コース主催により『ワークショップ&シンポジウム・聴覚障害とダンス』を開催した。これは「ブルガリアと日本のダンスの架け橋プログラム」という草の根交流を続けているセッションハウスとの共催企画でもあり、ブルガリア大使館の後援も得るなど、演劇博物館の研究活動が地域と協力し、かつ国際的な広がりも獲得した貴重な機会となった。

8月8日(月)、会場の早稲田大学染谷記念国際会館には、夏休み期間にも係わらず学内外から参加者が多数集まり、テーマへの関心の高さを物語った。

第一部、ワークショップ「インクルーシブな活動としてのダンス」は、障害の有無に係わらず人が共に存在し、共感しあう場としてのダンスに着目したものだ。ゲスト講師に、同アカデミー・バントマイム科助教授アレクサンドラ・ホン氏、ダンスによる聴覚障害教育に携わっている鳥取大学地域学部芸術文化センター教授、佐分利育代氏を迎え、受講者として同バントマイム科学生4名(内聴覚障害者3名)、日本の聴覚障害教育関係者、学生約20名が参加した。両講師は異なる指導方法ながら共に受講者の積極的な意欲、自由な発想と身体表現を引き出して大いに盛り上がり、ダンスによるインクルーシブな活動の可能性を明確に示した。

第二部、シンポジウム「聴覚障害とダンス～ブルガリアと日本における現状と今後の可能性」では、両講師の基調報告後、パネリストに同アカデミー・ダンス科主任ベトヤ・ストイロバ氏、慶応大学教授石井達朗氏が加わり、若松美黄氏(舞踊学会会長)の司会により活発な議論が展開された。ダンスによる聴覚障害の指導方法、目的の差異、有効性から国の教育政策にまで議論が広がり、今後の可能性と課題が示された。すべての発言は、ブルガリア語・日本語、ニカ国手話に通訳され参加者全員の意思疎通を図ったが、何よりもすべての人が持つ身体と、身体表現としてのダンスの豊かさが交流を助け、具体的な成果に結びついたと思われる。

尚、本企画は舞踊コースのプロジェクト「コンテンポラリー・ダンスの振付法における現状と課題」の一環として成果が活かされる。

(客員講師 稲田奈緒美)



第二部 シンポジウムの模様

古典演劇研究コース 活動報告

新潟吉田文庫調査レポート

2005年8月22日～26日、竹本幹夫拠点リーダー(演劇博物館館長)、客員研究助手、特別研究生を中心とした計7名の調査チームが、新潟市大鹿(旧新津市)の吉田文庫へ調査に赴いた。

吉田文庫は早稲田大学理事であり、世阿弥の伝書を発見したことで知られる吉田東伍博士(1864～1918)のご実家であり、竹本館長の発見により所在が明らかになった、世阿弥伝書『三道』新出本(『演劇研究センター紀要』Ⅲにて紹介)の所蔵機関でもある。文庫長の旗野博氏にはCOE研究協力者として、全面的にご協力いただいている。

今年5月に4名で文庫に赴き、予備調査として書庫内の大まかな把握を行った。能楽関係資料や博士のご専門である地理学の文献だけでなく、医学書や朝鮮の古典籍なども管見に入った。博士の向学心や研究の幅の広さについては旗野文庫長や東伍博士のご嫡孫吉田ゆき氏から伺ってはいたが、その一端が窺い知れた。今回の調査ではこの予備調査結果をふまえ、能楽関係資料及び東伍博士宛書簡の書誌調査・資料撮影を中心に作業を進めた。

能楽関連では東伍博士の自筆原稿や研究ノートのほか、『信西古楽図』や現物が焼失した宴曲資料等の影写本も管見に入った。また、貴重資料を撮影したガラス乾板ネガ約100枚を演劇博物館で一時借り受け、研究成果公開促進費「演劇情報総合データベース」の一環として、修復の上、データベース作成を行うことにもなった。

書簡調査では古典籍資料の貸借を記した葉書や、資料の書写依頼を承った筆耕からの書簡、東伍博士も執筆した雑誌『能楽』(1902～1921、データベース試験公開中)の執筆者からの書簡・賀状等が管見に入った。その膨大な数にも驚いたが、東伍博士ご自身により年次、内容別に分類・整理されており、博士の分類能力にいたく感銘を受けた。また、早稲田大学の学生からの授業欠席理由をしたための葉書からは、当時の学生生活を垣間見ることができた。と同時に、演劇研究だけでなく、他分野の研究者との頻繁な書状のやりとりからは、博士の交流関係や学問領域の広さばかりではなく、その人間性の一端をも知ることもでき、意義深いものであった。

なお、今回の具体的な調査結果は、今後の成果報告発表会や次号以降の紀要等において、調査メンバーが随時報告していく予定である。

(客員研究助手 江口文恵)



吉田文庫(新潟市大鹿)

アーカイブ構築研究(演劇)コース 活動報告

トリア大学日本学部(ドイツ)との学術協力協定にもとづき、共同プロジェクトとして作成した「雑誌『能楽』記事索引データベース」を、演劇博物館公開データベース「デジタル・アーカイブ・コレクション」にて試験公開した。本データベースは明治から大正期



雑誌『能楽』記事索引データベース
<http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/nogaku>

にかけて刊行された『能楽』の全記事約4,500件を、記事タイトル、著者、巻・号・頁、出版年月日のほかキーワードで検索できるようにしたものである。筆者については日本語とローマ字で、キーワードについては英語で検索語を入れることができ、また一覧から選択して検索することも可能である。キーワードについては、一般語彙(General Index)、人名(Persons' Index)、曲名(Titles of Plays)、書名(Titles of Publications)、地名(Geographical Index)のカテゴリに分けている。索引作成の過程でトリア大学側と打ち合わせを重ね、日本国内だけでなく、海外の能楽研究者が利用するツールとしても役立つよう工夫した。今後さらに改良を加えて正式公開する予定である。

古典演劇コース活動報告にもあるように、吉田東伍博士も「世阿弥十六部集註解」(共著)の連載等、執筆者の一人として名を連ねている。最近では明治・大正期の能楽研究も盛んになっており、このデータベースが研究の手助けとなれば何よりである。

(演劇博物館 山本浩幾)

アーカイブ構築研究(映像)コース 活 動 報 告

映像アーカイブでは継続プロジェクトとして、中国に残されている戦前の映画資料の発掘とグリフィス・プロジェクトを進めている。中国プロジェクトでは、古物市場における調査、各地の図書館における調査がなされた。映画フィルムを見つけるのは容易なことではないが、本年度の調査ではヨーロッパおよび日本の戦前の映画フィルムの一部を発見し、購入することが出来た。これらの可燃性フィルムについては、本年度予算によって復元し演劇博物館に納入できる見通しである。フィルム自体の調査研究は、入手されたフィルムが不燃化された段階で行なうこととした。

図書館の調査については、かなり難航した。上海図書館がかなり自由に閲覧の便宜を与えてくれるのに対し、地方の図書館は戦前の雑誌等は基本的に公開していない。映画に関しては上海図書館の蔵書量が最も多いのは確かだが、ここにはないような資料を地方の図書館で発見しても、コピーを作るところか閲覧自体を認めてくれないために、それ以上先に進めないという経験をした。中国プロジェクトはこれまでも、そして本年も、かなりの実績を挙げたことは事実であるが、今後どうするか見直しも必要かもしれない。

本年度は新たに、ロシア・プロジェクトを立ち上げ、露文の貝澤先生の協力を得て、モスクワとサンクト・ペテルブルグに行き、映画資料の調査をした。滞在日数が足りなかったため、国立のフィルム・アーカイヴであるゴスフィルムフォンドでは思っていたような成果を挙げることは出来なかったが、モスクワのレーニン図書館では資料の複写の許可を得ることが出来た。かなり時間はかかりそうだが、帝政期の「シネ・フォノ」誌を初めとして、ソヴィエト時代の主要な映画雑誌をマイクロフィルムに撮影してもらう依頼をした。これらが到着すれば、1907年から1929年までのロシア・ソヴィエト映画に関するわが国でもっとも包括的な資料になると思う。

7月上旬にボローニャにおいて行なわれた「発見された映画」の集まりにおいて、各国の研究者と様々な意見交換をしたが、その中で戦前にヨーロッパに渡った日本映画の話題が出て、現在でもヨーロッパに残されている戦前の日本映画のフィルムをCOEとの共同作業という形で復元しようということになった。まだいくつか課題は残されているが、映像アーカイブの本年度の予算内で、この計画を進めていきたい。恐らく来年度のCOEが始まる頃には、復元された35ミリのネガ・フィルムを演劇博物館に納入できると思う。

外国のアーカイブとのジョイント企画で予算が使われるために、グリフィスのフィルムの購入がどの程度できるのか、まだ確定しない。出来る限り早くこれを確定するつもりである。本年度は1909年のグリフィス作品を購入する予定になっている。グリフィスのバイオグラフ期については継続的に研究してゆくことになる。(事業推進担当者 小松弘)

演劇理論研究(東洋)コース 活 動 報 告

演劇理論研究(東洋)コースでは、2005年度の上半期に二回の定例研究会を行っている。第一回は「近現代中国演劇における身体・教育・政治」をテーマとして、5月14日に開催した。研究発表は二本あり、今年度より演劇博物館外国人特別研究員となった劉文兵が「映画『マンゴの歌』における政治的リーダーの身体表象」という題目で文革期の映画に関する研究発表を行い、続いて4月から東洋コース客員研究助手に就任した木村理子が「モンゴル演劇史～歌で演じた革命期」というタイトルで、モンゴル演劇の形成について研究発表を行った。

また第二回定例研究会は学術フロンティア文明戯研究の第一回研究会を兼ねる形で「中国演劇と西洋近代の受容——文明戯を中心に」というテーマのもと、7月30日に行われた。瀬戸宏氏(摂南大学外国語学部教授)が「文明戯研究史における欧陽予倩の貢献と限界」という題目で、文明戯時期から幅広く演劇活動を行った欧陽予倩の果たした役割への評価と問題点に関して研究発表を行った。また、鈴木直子(COE東洋コースTA)が瀬戸宏氏の著書について「書評：瀬戸宏『中国話劇成立史研究』」とする発表を行っている。

さらに2005年度COE客員研究助手海外研修枠で、客員研究助手の木村理子が、8月3日から9月21日までの50日間、モンゴル国立大学の招聘でモンゴル・ウランバートルに出張した。モンゴル出張中、中国・内蒙古大学蒙古学学院の招聘で内蒙古自治区呼和浩特(フフホト)を訪問、内蒙古大学では院生を対象に「現代モンゴル文化事情」について講義を行った他、アラ善(アラシャン)盟アラ善左旗で開催されたアグワーンダンドル学会に参加した。今回の出張中、ウランバートルではモンゴル国立ドラマ劇場、及び民主化以降モンゴルで人気を博している「コメディ・シアター」の活動現状について調査を行った。

(客員研究助手 木村理子・TA 鈴木直子)



9月17日、モンゴル労働組合文化中央会館にて上演された、コメディ・シアター〈シネ・ウエ・プロダクション〉とラハグバスレンによる「舅姑バンザイ」より(脚本家ボヤン氏撮影)

Event Calendar

◆アーカイブ構築研究(映像)コース・演劇理論研究(舞踊)コース 「バレエと映画」研究会3回シリーズ

第1回

日時：2005年11月5日(土) 14：40～17：50

会場：早稲田大学西早稲田キャンパス6号館3階318教室
(レクチャールーム)

第2回

日時：11月19日(土) 14：40～17：50

会場：西早稲田キャンパス6号館318教室 (レクチャールーム)

第3回

日時：12月3日(土) 14：40～17：50

会場：文学部キャンパス31号館310教室

舞踊側講師：鈴木晶 (法政大学教授、早稲田大学講師)

映画側講師：小松弘 (早稲田大学教授)

※入場無料・要予約：21coe-en-event@list.waseda.jp

◆古典演劇研究(歌舞伎・日本舞踊)コース ポール・クロードル没後50年研究上演事業 舞踊詩劇「女と影」

開催日：11月28日(月) 18：30～

出演：中村福助、和栗由紀夫、藤間勘十郎、中村芝のぶ

原作：ポール・クロードル

補綴：鈴木英一

構成・演出・主演：中村福助

演出協力：川村毅

演出補・舞台監督：浅香哲也

作曲・音楽監督：常磐津文字兵衛

作調：田中傳左衛門

振付：藤間勘十郎、和栗由紀夫

舞台美術：金井勇一郎

衣裳：桜井久美

照明：高山晴彦

音響：八幡泰彦、吉越誠一

制作協力：「女と影」運営事務局

後援：在日フランス大使館、松竹株式会社



大隈講堂での打ち合わせにて



公式ホームページ

[http://www.onna-](http://www.onna-kage.com/index.html)

[kage.com/index.html](http://www.onna-kage.com/index.html)

お問い合わせ：

info@onna-kage.com

◆演劇理論研究(西洋/比較)コース

集中講義「サミュエル・ベケットの演出術」(仮題)

開催日：2005年12月2日(金)～4日(日) 15：00～18：00
(初日のみ17：00～20：00)

場所：早稲田大学西早稲田キャンパス6号館318教室

講師：ミハエル・ヘルター

言語：英語(通訳なし)

◆演劇研究センター

国際研究集会「演劇資料と演劇研究—テキストと画像—」

開催日：12月9日(金)～12月10日(土)

場所：早稲田大学国際会議場

12月9日(金) 13：00～17：30

基調講演

・日本演劇 赤間亮(立命館大学教授)、タイモン・スクリーチ
(ロンドン大学SOAS教授)

・中国演劇 車文明(山西師範大学戯曲文物研究所所長)、
邱坤良(国立台北芸術大学校長)

12月10日(土) 10：00～17：30

①研究報告 10：00～12：00

埋忠美沙(役者絵研究会、COE特別研究生)

倉橋正恵(日本学術振興会特別研究員)

千田大介(慶應義塾大学助教授)

②国際シンポジウム 13：00～17：00

・日本演劇 司会：和田修(早稲田大学助教授)

アンドリュース・ガーストル(ロンドン大学SOAS教授)、岩田秀行
(跡見女子学園大学教授)、神楽岡幼子(愛媛大学助教授)

・中国演劇 司会：平林宣和(早稲田大学助教授)

吉川良和(一橋大学教授)ほか

・講師全員による日中合同の質疑応答

◆演劇理論研究(西洋/比較)コース

第三回演劇論講座

開催日：2006年1月14日(土) 14：40～17：00

場所：早稲田大学西早稲田キャンパス6号館318教室(予定)

講師：七字英輔(演劇評論家)

◆古典演劇研究(能楽)コース

能楽学会共催企画「狂言とことば」

開催日：3月20日(月) 10：30～

場所：早稲田大学小野記念講堂

第一部 講演 10：30～12：00

第二部 中世口語の復元実演 14：00～16：00

出演：山本則重・山本則秀(狂言方大蔵流)ほか

第三部 シンポジウム 16：00～17：00

共催：能楽学会

*以上のイベントの開催場所に関しては、右記のホームページをご参照ください。<http://www.waseda.jp/jp/campus/index.html>

演劇研究センターメールニュース配信のお知らせ

演劇研究センター主催の公開研究会やシンポジウムなどの情報をメールニュースでお届けします。

(1)配信は不定期です。

(2)個人情報メールの発信および演劇研究センターからのお知らせ以外には使用いたしません。

(3)ご不要の場合にはいつでも配信を止めることができます。

(4)携帯電話のメールアドレスには配信いたしません。

登録は右記のホームページからお願いします。<http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/index.html>



『浄瑠璃素人講釈 上・下』

(杉山其日庵著、内山美樹子・桜井弘編 岩波書店 2004年10・11月発行)

古典演劇研究(浄瑠璃)コース2003年度ゼミ「『風』研究の原点『浄瑠璃素人講釈』」で一年間にわたって取り上げた『浄瑠璃素人講釈』が、岩波文庫から復刻されました。『浄瑠璃素人講釈』は雑誌『黒白』に大正8年前半から連載された「義太夫虎の巻」を一巻にまとめたもので、初版は大正15年に刊行されました。義太夫節の芸の根幹である「風」を主題とし、近代浄瑠璃研究に多大の影響を与えた本書は、初版刊行後、昭和50年、平成9年に復刻版が出ましたが、いずれも入手は困難で「幻の名著」となっていました。今回の復刻では、初版本における誤植・誤記のほか、興行記録や歴史的事実に照らして明らかに誤っていると思われる事項の訂正等をおこない、初出誌と初版本との本文の相違部分を挙げるとともに、文中に登場する演者等について丁寧な注釈を加え、下巻巻末には人名索引を付すなど、従来になく読みやすいテキストとなりました。本書は、主題である「風」を語る以外にも、明治・大正の名人たちの姿を鮮やかに描き出しており、気軽な読み物としても楽しめます。また、「義太夫虎の巻」は初版本刊行以後も『黒白』誌上に連載が続けられましたが、今回の復刻では、単行本未収録の11編を「増補 浄瑠璃素人講釈」として収録しました。この部分が再録されるのは本書が初めてです。現在『黒白』を所蔵する機関は極めて少なく、今回、単行本未収録部分が岩波文庫のように入手しやすい形で復刻されたのは画期的なことと言えます。(特別研究生 伊藤りさ)

2006年度特別研究生 募集

概要:

21世紀COE特別研究生は、21世紀COEプログラムに参加し、研究に従事することができます。研究遂行上必要な図書館等学内施設の利用について便宜を図るほか、災害傷害保険の加入等を行います。給与・研究費等は支給されません。

募集期間:

2006年2月1日(火)～3月10日(月)締切

応募資格:

- (1) 本大学の博士後期課程に在学する者または課程修了者
- (2) 他の大学院または研究所等(外国の研究機関を含む)から派遣された博士後期課程在学者または課程修了者
- (3) 前2号に準ずる学歴または学識を有する者として、大学が特に認める者

採用期間:

2006年4月1日～2007年3月31日(年度内の採用となります)

詳細は下記のホームページをご覧ください。応募書類の書式もこのホームページからダウンロードできます。

<http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/jp/student/index.html>

編集後記

早稲田大学演劇博物館21世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」のニューズレター第2号を、前号に引き続きどうにか上梓することができた。

第2号の活動報告は、「リトアニア・ポエティック・ドキュメンタリー映画祭」報告を筆頭に、中国、ロシア、フランス、ブルガリア、韓国、アメリカ、ドイツ、モンゴルにいたるまで様々な国を網羅しており、各国の研究者との多彩な交流に改めて驚かされる。また、「新潟吉田文庫調査レポート」など、国内研究活動も多岐にわたっており、当拠点のワールドワイドな活動が垣間見える紙面構成となっている。

修士の学生の際に同人誌の編集を一度務めた以来の作業であり、不安を抱えたままの船出であった。ドタバタの心地好さを楽しむにはあまりにも役不足であったが、無事完成までこぎつくことができたのは、同僚の助手のみなさんをはじめ、紙面づくりに関わっていただいた方々の協力によるところが大きい。この場を借りて御礼を申し上げたい。

News Letter 第2号

2005年11月20日

編集: 江口文恵 川島京子 川島健 木村理子 志村三代子 宮崎刀史紀

発行者: 早稲田大学21世紀COEプログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館・演劇研究センター

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL: 03-5286-1829

URL: <http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/>